

八月四日

稚内グランドホテルでの目覚めは、あまり爽快なものではなかった。昨日の旭川での朝は、もっと爽やかだった。

「そろそろ疲れがたまってきたのかな」と井出氏が朝食のときポツリと言った。今頃ホテルのレストランで食事をとっているのは、俺達二人だけだ。ウェイトレスがCLOSEDの看板を出していた。

ホテルを出てすぐにGSXとソアラが同時にガスを入れる。稚内市外をほんの少し同時に走り、稚内分岐で俺は右に、ソアラは左に分かれる。「それじゃ・・・」と互いに笑顔で手を振って別れる。グッドラック！

井出氏と分かれて一人きりになる。同時に街も終って、サロベツ原野の中に放り出されていた。

風が吹き荒れていた。日本海からの冷たい風だ。しかも空には重苦しい灰色の雲だ。いつ雨が降るか分かりはしない。この風で雨が降り出したら、嵐と同じになってしまう。

途端に心細くなった。このツーリングの中で最もつらい時間が始まった。こういうとき、クルマなら何の心配もいらない。しかし、バイクでは生身で自然の中に放り出されたことが肌で解る。

強風、灰色の空、そして荒涼とした風景・・・。よほど街へ引き返そうかと思った。むしろように都会が恋しくなった。しかし、俺と同じ方向へ淡々と進むXS250のツーリストを見つけた。不動の姿勢で、風など吹いていないかのように、自分のペースで走っている。それを見て勇気付けられた。俺も！

この風ではゆっくり走っていても同じだった。そして一刻も早く、ともかく留萌までたどり着きたかったから、時速八〇キロのスピードでとばして行った。XSをゆっくり追い越しながら手を振った。ピース！

地平線のすぐ上の空、留萌の方向がかなり明るい。細く線状にその部分だけが明るいのだ。そのことが、どれほどありがたかったか。

それにしても寒い。ほんの数キロ走ったところで、再びオーバーパンツを履き、タオルのマフラーをした。こんなことをしている

うちに、さっき追い越したXSに抜き返されてしまう。ほんのちょっとした休憩が距離的に大きなロスを生むことがよく解る。

こんな天候の原野でも自転車のツーリストが走っている。なんという根性。それに比べたらバイクなんて楽なものだ。心をこめて自転車に手を振る。ピース！

こういうときはピースサインにも心がこもる。生涯で最も重みのあるピースサインはこの日に交わした何回かのものだろう。バイクと出会い、ピースサインを交わすことがどれほど楽しみだったことか。ピースサインに涙が滲む。

ときおり町に入るとほっとする。

天塩川を越えるところまでは昨日も走った道だ。交差点、と言っても信号すら無いのだが、そこでロードマップを広げて確認。確かにここを右折するのだった。サロベツ原野の南の端を日本海に向かって走ることになる。

両側は牛の牧場ばかりだった。途中でバイクを止めて煙草をすったり写真を撮ったりした。ここまで来ても、天候は少しも良くない。相変わらず心細い。この心細さが薄らいできたのは、明らかに天塩町のあたりからだろう。

天塩から遠別、羽幌、苫前と走る。風はどんどん弱くなって、空も少しずつ明るい。むろんまだ曇ってはいるのだが。

ローソク岩のところで、バイクを止めて写真を撮る。大阪から来たという父子や、これから稚内に向かう若者達と少し話をする。空もずいぶんと明るい。

どの辺りを走っていたときだろうか。とにかく海を見ながら走っていたときだ。突然、日の光の中へ出たのだ。そして空から急速に雲が無くなり、風景が一転して鮮烈に明るくなった。これこそ夏、とでも言いたいような・・・。

これで気分も一転して明るくなった。ツーリング・ライダーがこれほどまで天候に左右されるとは思わなかった。ともかくもう大丈夫だと思った。留萌までは走っていける。しかし、さらにその先まで行けたら行こうと思った。その先というのは言うまでもなく

札幌だ。

留萌の直前の鬼なんとかというところが海水浴場だった。こんな北の、それも日本海に海水浴場があるとは思わなかった。しかし、この町に漂っている磯の香は、その昔俺の町にもあった。とても懐かしかった。何だか北海道を走っているような気分ではなく、タイムマシンで遠い昔を走っているような気さえする。

そして留萌へ。まだ二時だ。

確かに街は街だ。稚内を出てから初めて見る街らしい街であることは確かだ。しかし、今から明日の朝まで、どうやってここで時間を潰せばいいんだ。とてもそんな気にはなれなかった。つまらない街でしかない。駅前に行ったり、街の中を少し走っているうちに、ますますその思いが強まった。

公衆電話で札幌のホテルへかける。どこも満室だ。ガイドブックの最後のほうにおっている「ニ幸園」に空き部屋があった。これで札幌に行ける！有頂天になった。

途中そば屋でもりそばを食って札幌へ向かった。三時過ぎだった。R233を走る。なんだか急にクルマが増えてきた。やはり、札幌へ向かう道だからだろう。しかし、もう気分は上々。今朝、稚内を出たときのことを考えると嘘みたいだ。

北竜町のガソリンスタンドでガスを補給。そこを右折すると札幌へ行く。ここからちょうど百キロと、スタンドのおやじが教えてくれた。百キロなんて軽いものだ。

石狩川が見えたりする。まだ北海道らしい風景であることに変わりはないが、ぐっと人口密度が増えてきたことが解る。

あれは江別市のあたりなのだろうか。とにかく大きな川をまたぐ橋のあるあたりだ。突然に大渋滞になった。久しぶりに左脇のすりぬけとか、超低速走行を強いられた。ふだんのシティランでは良くやることだが、長距離を走って疲れているときにこれはつらい。

しかし大都市に近づいているのだということが確かにわかる。結局これは工事のための渋滞で、すぐに元へ戻った。

とうとう札幌へ来た！五時頃になっていた。久々に見る大都会だ。ツーリングに来ていて都会に嬉しがるのもどうかと思うが、まあ俺

らしくていいじゃないか。

何度も地図とにらめっこをして、とにかく札幌駅の表へ出た。ニ幸園はこのあたりなのだが・・。よく見まわすと遂に見つけた。見つけたのはいいが、遠くから見る感じが何か変だ。ともかくバイクでそばまで行ってみた。

やはりそうだ！ホテルはホテルでも、これはラブホテルじゃないのか。しかも。とびきり汚いラブホテルだ。こんな所に泊まるのか！情けなくなった。よほど玄関を入ろうかと思った。札幌に来てしまった以上、他に宿は無いのだ。しかし、そうできなかった。バイクに乗って、そのホテルから逃げるようにして再び札幌の街の中へ出た。もうそろそろ暗くなり始めていた。

一つ目の電話ボックスで聞いたホテルも駄目だった。十円玉が無いから煙草屋でくずしてもらおう。

二つ目の電話ボックスで、比較的まともそうな「桑園グリーンホテル」という所にシングルの空き部屋があるという。諦めずに聞いてみるものだ。こうなるまでに、札幌の街の景色を見ながら途方にくれたりもしたのだが、ともかく見つかった。

少し探したが、そのホテルは見つかった。まともだ。札幌駅から少し離れているのと、部屋にシャワーが無いのが難だが、そんなことは言っていられない。大喜びでフロントに入った。

疲れていたの、あまり外では飲むつもりはなかったが、ともかく駅前まで歩いて行った。十五分ばかりかかる。とにかく、この都会の夜の空気がとても懐かしかった。

駅前で地下街に入る。男が独りで入れるのはラーメン屋くらいしか無い。だからビールとみそラーメンを注文した。腹が減っていたから、とても美味しい。大体、ツーリングに出てからは、毎日ビールが美味い。

ラーメン屋を出てから、向かい側の本屋に入ってみた。そこで「バイク・イン・北海道」という本と、札幌市の大きな地図を買った。ホテルへの帰り道、ウイスキーのハーフボトルと缶ビールとつまみを買った。

ホテルの部屋では充分くつろいだ。シャワーがさすがに欲しかった。

ホテルの部屋から「ホテルニューおはる」に居る井出氏に電話をした。朝、別れたばかりなのに、とても懐かしかった。

ともかく札幌に来て、しかも苦勞して探した宿に泊まれたことで大いに嬉しかった。この日はツーリング中の最長距離を走った。しかし疲れた！